徳育科のパイオニア　コミュニティスクール

八小だより

武蔵村山市立第八小学校　令和３年２月１日

http://www.city.musashimurayama.lg.jp/mmced8s/index.html

教育目標
◎ 考える子
○ 思いやりのある子
○ やりとげる子
○ 礼を重んずる子

行動目標
わけをそえて話すことができる子
教室で話しているのは一人

「年賀状」と「学校」に見る変わりゆく風景と変わらない風景

副校長　植杉　義久

今年も多くの年賀状をいただきました。私は毎年年賀状をお送りするのが遅くなってしまうので、恐縮しながら皆様からいただいた年賀状を拝見させていただいています。仕事上の上司や同僚、教え子やその保護者の皆様からいただくこともあります。年賀状には、その人の人柄や近況が反映されているので、それを見ると年明けからとても温かく穏やかな気持ちになりつい微笑んでしまいます。

年賀状の始まりは平安時代と言われていますが、当初は年の初めに挨拶回りをする形式だったようです。それが江戸時代になると交友関係が広くなり、遠方には簡単に行けないため挨拶を書状で済ませるようになったことが現在の年賀状になっています。ですから、年賀状はお世話になっている方々へ年始の挨拶をしようとする日本人の律義さと礼儀正しさの表れだと考えられます。

私は「年賀状」という言葉から連想することが２つあります。１つは、『父への憧れ』です。小学生の頃、配達された年賀状をポストへ取りに行くのが私の仕事でした。その届いた年賀状を家族４人に分けるのですが、私が数枚なのに対し、父はその１０倍も２０倍も連日届いていてうらやましく感じていました。「こんなにたくさんもらえる人になりたい。」と思ったのを覚えています。その枚数の多さは、父が人との出会いを大切にしていた証のような気もします。

もう１つは、『人とのつながりを確認できるもの』です。私は、１２年前まで北海道で教員を９年間させていただいていました。その当時にお世話になった上司や同僚とは普段連絡を取ることはありませんが、一人前の教員になるよう指導していただいたお礼を兼ねて、年賀状を作成する際には近況を報告しようと考えました。すると相手からも年賀状をいただき、懐かしく温かい気持ちになっている自分に気が付きました。そして年賀状は１年に一度、「人とのつながりと自分の存在を確認できるもの」なのだと考えるようになりました。

そんな年賀状ですが、発行枚数のピークは２００３年で、直近１２年間は連続して減少しているようです。その要因の１つにSNSの普及があげられます。前述した「近況を報告する」「人とのつながりを確認する」ということであれば年賀状である必要はない気もいたします。SNS によって変わってきたのは、「年賀状」を取り巻く風景だけではありません。それは「学校」にも当てはまります。

来年度からは国が掲げる「ＧＩＧＡスクール構想」の実現に向け、児童・生徒が１人１台のタブレット端末を活用しながら新しい学びを進めていくことになります。現在は本校でも都、市の教育委員会の指示に従い各教室にタブレットを保管する充電保管庫設置とネットワーク環境の強化工事の準備を進めているところです。ＩＣＴの活用が日常のものとなっている現代において、更に学校における学びの風景は変わっていくかもしれません。（詳しくは１月２７日(水)に配布した「Let's challenge!」を御覧ください。）

学びの中に時代と共に変わっていくものがあれば、変わらないものもあります。その１つが日本の伝統文化に関わる内容です。行事では書き初めや昔遊び、餅つきなどが挙げられます。授業では、国語の短歌・俳句の鑑賞や創作活動、徳育科の内容項目では「伝統と文化の尊重」「国や郷土を愛する態度」があります。音楽では日本の楽器の音色の特徴や旋律を聴き取り、その良さを感じたり味わったりします。そして私はその中に「年賀状」も加え、「感謝と敬意」をもって「新年に御挨拶をする」日本の文化として子どもたちに伝えていく必要があると思っています。挨拶回りが書状という形式に変わったように郵便がSNS という形式に変わっても。

コロナ禍でもあり先行きが不透明な世の中ですが、本校では高度情報化社会に対応し日本人としての自覚と誇りをもった児童の育成に邁進して参ります。今後とも学校運営に御理解・御協力を賜りますようお願い申し上げます。